―三重にはかつて、近代洋画の〈停車場〉があった―

日本で油彩画が普及し始めた頃、のちに近代美術史に名を遺す藤島武二、鹿子木孟郎、赤松麟作らが図画教師として三重に赴任し、それぞれの影響や足跡をこの地に残しました。彼らが著名な画家として世間に知られるようになるのは後年のことで、三重では二十代のひとときを過ごしたにすぎませんが、この地で未来を思い描き、大きく羽ばたいていく原動力を培ったのです。三重という〈停車場〉から彼らは旅立ち、藤島は東京で、鹿子木は京都で、赤松は大阪でそれぞれ洋画家として活躍し、各地で後進を育てて教育者としても活躍しました。

また、彼らが画家として過ごした青年時代は、油彩画が「洋画」と呼ばれながら日本の美術として根づいていく時期にそのまま重なり合います。

明治20年代から30年代は、まさに「洋画の青春」と呼ぶにふさわしく、活力に満ちた作品が次々と生み出されました。

1982（昭和57）年に開館した三重県立美術館は、洋画と呼ばれる近代日本の油彩画をコレクションの収集方針のひとつに掲げて収集・調査研究活動を行い、また開館以来40年以上にわたり洋画や洋画家に焦点をあてた展覧会を数多く開催してきました。本展覧会では、当館のコレクションの中でも重要な位置を占める洋画をテーマに据え、三重にゆかりのある洋画家たちの画業を振り返るとともに、当時の三重の美術状況や美術教育についてあわせて紹介します。

1

2

5

3

4

6

7

8

1 藤島武二《桜の美人》 1893－95年頃 石水博物館蔵 2 藤島武二《自画像》 1903年頃 石橋財団アーティゾン美術館蔵 3 鹿子木孟郎《ノルマンディーの浜》 1907年 泉屋博古館東京寄託 4 鹿子木孟郎《横向きの男》 1893年 府中市美術館蔵 5 福原霞外《春日之森》 1899年 うらわ美術館蔵 6 吉澤儀造《瑞巌寺（松阪市岩内）》 1901年頃 小杉放菴記念日光美術館蔵 7 赤松麟作《孔雀図》 1894年 大阪中之島美術館蔵 8 赤松麟作《自伝絵巻やっとこどっこい》（部分） 1949年 大阪中之島美術館蔵

関連プログラム

※手話通訳・要約筆記、その他支援をご希望の方は、2週間前までにご相談ください。

記念講演会《津の停車場（春子）》から始まった ―明治洋画研究の「青春」

講師：児島薫（実践女子大学文学部美学美術史学科教授）
日時：3月3日［日］午後2時－午後3時30分
会場：三重県立美術館地下1階講堂　定員：150名
参加費無料、当日先着順（直接講堂にお越しください。午後1時30分に開場します。）

担当学芸員によるギャラリートーク

日時：2月11日［日・祝］、3月16日［土］ 午後2時－午後2時30分
会場：三重県立美術館企画展示室
※展示室に入るため、洋画の青春展観覧券が必要です。展示室入り口にお越しください。

ウォーキング「春分の日・津のまち歩き」 本展で紹介する洋画家たちゆかりの場所を歩いて巡ります。

案内人：原 舞子（当館学芸員）
日時：3月20日［水・祝］午後1時30分－午後3時30分　※少雨決行
会場：近鉄「津新町」駅 ／ 解散：津偕楽公園周辺　定員：15名
参加費無料、事前申込制（希望者多数の場合は抽選となります。）
※詳細は1月中旬にウェブサイトに掲載します。ウェブ申込フォームよりお申込みください（3月4日［月］締め切り）。

交通案内

津駅（近鉄・JR）西口より徒歩約10分。または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き（むつみ・つつじ経由）」、「夢が丘団地行き（総合文化センター前経由）」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分。
駐車場もご用意していますが、できる限り公共交通機関をご利用ください。

同時期に開催の展覧会

柳原操基金・柳原義達顕彰事業　Y² project **藤原康博　記憶の稜線を歩く**
2023年11月3日［金・祝］―2024年2月4日［日］ 柳原義達記念館

特集展示 **矢守一声展**
2024年1月10日［水］―3月31日［日］ 2階常設展示室第2室

次回の企画展（予定）

『シュルレアリスム宣言』100年 **シュルレアリスムと日本**
2024年4月27日［土］―6月30日［日］

三重県立美術館 Mie Prefectural Art Museum

表面上：鹿子木孟郎《津の停車場（春子）》 1898年　三重県立美術館蔵
下左：藤島武二《造花》 1901年　東京藝術大学蔵　下右：赤松麟作《夜汽車》 1901年　東京藝術大学蔵